

代である。帰り際には、祖母は玄関の外に出てわたしと母を見送った。「おばあちゃんの見送りよらすよ。振り返らんね」と母が促した。わたしは振り返らなかつた。照れくさかつたのである。なぜ、あの時振り返らな

た。佐世保の港が見える丘に登って友人と歌を歌った。「遠き別れに耐えかねて……」。小林旭の「歌」がはやっていて、この歌と「北上夜曲」は、いまでも宴席やカラオケで歌う。祖母から上がる」といつてくれた。居間

青春は照れくさい

かつたのだろうか。いまでも後悔している。前へ進むことで気が持たない。飛ばし込んだ演劇界は悪い仲間だらけであつた。佐世保からは列車で東京へ向かった。「西海号」である。左

その日から岡本喜八監督宅を訪ねることだけが喜びとなった。いろいろなアルバイトをした。主に肉体労働であつたが、エトセトラである。いつも物思いにふけていた。韋駄天走りであつた。ロシアの劇作家アントン・チェーホフが「わたしの大学」といつている。「社会がわたしの大学であつた」。確かに、人間を学ぶには実社会が大

松浦を離れる日、わたしは母に伴われて星鹿の祖母に別離の挨拶をしに行った。祖母は正装の和服で待っていてくれた。「悪か仲間には入らんことおし」といつて、輪ゴムで束ねた百円札の束をくれた。祖母が日頃からこつこつと貯めていた百円札の束であつた。わたしは礼もいわず、その束をポケットに押し込んだ。照れくさかつたのである。

なんにでも照れるのが青春時代である。帰りに、祖母は玄関の外に出てわたしと母を見送った。「おばあちゃんの見送りよらすよ。振り返らんね」と母が促した。わたしは振り返らなかつた。照れくさかつたのである。なぜ、あの時振り返らな



おかべ・こうだい 1979年に「肥前松浦兄妹心中」で岸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。71歳。

代にはアルバイトで人間を学んだ。そのすべてが劇作術の役に立っている。松本清張ほどではないが。

(松浦市出身)